

特別支援学校(知的障害者)における就労支援に関する研究(7) —卒業生への追跡調査から—

榊 慶太郎 [鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター研究協力員]

今林 俊一 [鹿児島大学教育学系(教育心理学)]

Research on employment support in a special needs school (students with intellectual disabilities)(7) :

From a follow-up survey of graduates

SAKAKI Keitaro and IMABAYASHI Shunichi

キーワード：特別支援学校、知的障害者、就労支援、卒業生、追跡調査

1. 問題と目的

特別支援学校においては、学校生活から職業生活への円滑な接続を図るキャリア教育に取り組み、また、卒業生への予後指導（アフターケア・アフターフォロー）として、卒業生が就労した事業所を訪問し、様子を把握して必要であれば支援を行っている。

キャリア教育で育成すべき力としては、「基礎的・汎用的能力」が示され、具体的内容については、「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の4能力に整理されている（文部科学省，2012）。各学校では、キャリア教育の充実に取り組む中、これらの能力を参考にしながら、工夫して教育活動を行っている。

本研究では、特別支援学校における卒業生の予後指導（アフターケア・アフターフォロー）への取組の意義として、次の3点を捉えている。一つ目は、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構障害者職業センター（2014）が、3年以上職場定着する要因として様々な支援の重要性を指摘しているとおり、卒業生の様子を把握することで就労を継続するために必要な定着支援を行うことができる。二つ目は、キャリア教育の充実を図る上で、卒業生の職業生活への適応の状態から在学時の指導を改善していく視点（今林・榊，2020）を得ることができる。三つ目は、文部科学省（2005）が示す特別支援学校に期待されるセンター的機能の一つである「福祉，医療，労働などの関係機関との連絡・調整機能」につながることを期待できる。

榊・今林（2020）は、一般就労した特別支援学校の卒業生（知的障害者）にインタビュー調査を行い、卒業生の就労の実態を把握し、分析することを通して、就労継続のための効果的な指導・支援の在り方についての考察を試みている。その結果、就労直後（約4か月）の卒業生にとって、効果的な関係機関との連携の課題を明らかにすることができた。そこで、本研究では、榊・今林（2020）の追跡研究として、卒業生の約1年後の状態やその取り巻く環境の変化を把握し、榊・今林（2020）の結果と比較・分析することを通して、就労を継続するために必要な視点を得ることを目的とする。

2. 方法

2.1. 調査対象者

本研究の調査対象者は、榑・今林（2020）と同一の3名である。調査対象者3名は、Y県立Z特別支援学校高等部を2019年3月に卒業しており、一般的な日常生活において言語でのコミュニケーションをとることができる。

2.2. 調査の内容

榑・今林（2020）の結果と比較するために、榑・今林（2020）の卒業生へのインタビューの質問項目を用いた。質問項目の内容は、①仕事をするとき困ったことがあるかないかの認知について、②相談者の有無について、③仕事をしているとき以外の時間の過ごし方について、④働くことでの貢献感について、⑤仕事をする中で見えてきた展望について、⑥学校で教わっておきたかったことについての六つの枠組みで構成されている。インタビューで聞き取る際には、全ての質問に対して、「はい、いいえ、分からない or どちらとも言えない」の3件法で回答してもらい、その回答に対する内容や背景等を可能な範囲で確認し、更に「昨年は～だったけれど、今はどうか（昨年と今を比べたときの違いはあるか）」と質問をすることで、昨年と比較して回答ができるようにした。また、本研究の調査実施時期は、新型コロナウイルス感染拡大の影響下であることから、質問項目に⑦新型コロナウイルスの流行に関する枠組みを加えた。具体的な質問項目についてはTable 1に示す。

2.3. 実施時期

2020年7月下旬にインタビュー調査を実施した。調査対象者である卒業生は全員が進路先での就労を継続しており、調査時点で就職後約1年4か月が経過（以下、就労後1年経過）している。

一方、榑・今林（2020）のインタビュー調査は、2019年7月下旬～8月上旬に実施し、調査対象者である卒業生は、調査時点で就職後約4か月が経過（以下、就労直後（約4か月））している。

2.4. 調査方法と手続き

本研究では、榑・今林（2020）と同様の調査方法と手続きを採用した。インタビューの方法は、対面しながら面接者の質問の意図を正確に伝えることができ、また、不明瞭な回答については、さらに詳しく尋ねることができる半構造化面接法である。インタビューは、それぞれの調査対象者の勤務終了後に職場で行い、要した時間は平均約31分であった。手続きとして、研究の目的を説明した後、面接者と調査対象者との間でインタビューに先立って、三つの確認等を行った。

一つ目は、調査対象者からの申し出によって、いつでもインタビューを中止したり一部について回答を拒否したりすることは可能であることを伝えた。二つ目は、面接を録音することの許可を調査対象者から得た。三つ目は、研究結果の公開について、プライバシーや権益の保護を最優先することを伝え、論文等にまとめて公開することの承諾を調査対象者から得た。

3. 結果と考察

インタビュー調査の結果について、就労直後（約4か月）と本研究のインタビュー調査の結果（就労後1年経過）を被験者ごとに七つの枠組み別にまとめた（Table 2 から Table 4）。分析及び考察は、就労直後（約4か月）と本研究のインタビュー調査の結果（就労後1年経過）を比較して行った。

Table 1 インタビューでの質問項目

質問項目
<p>1 仕事をするときに困ったことがあるかないかの質問。※今までに困ったことはなかったか。【認知】</p> <p>○人間関係・コミュニケーションの面</p> <ul style="list-style-type: none"> あなたは、仕事のとときに相手の意見をしっかりと聴くことができますか。 あなたは、仕事のとときに自分の考えを正確に伝えることができますか。 あなたは、与えられた役割(仕事)を最後までやり遂げることができますか。 <p>○仕事の指示理解・対処能力の面</p> <ul style="list-style-type: none"> あなたは、仕事のとときに指示されたことについて理解できていますか。 あなたは、仕事で分からないことや困ったことがあったとき、どのようにすれば良いかを考えていますか。 あなたは、仕事で分からないことや困ったことがあったとき、解決することができますか。 <p>○仕事の内容の面</p> <ul style="list-style-type: none"> あなたは、今の仕事内容は自分に合っていると感じていますか。
<p>2 相談者の有無について【相談者の有無】</p> <ul style="list-style-type: none"> あなたは、困ったことがあったとき、誰かに相談することができますか。
<p>3 仕事をしているとき以外の時間の過ごし方について【余暇・生活】</p> <ul style="list-style-type: none"> あなたは、連絡を取り合っている友達がありますか。 あなたは、習い事やスポーツなどを行っていますか。 あなたは、休日に外出をしていますか。
<p>4 自分がしている仕事に対する社会の中での位置付け・価値付け【貢献感】</p> <ul style="list-style-type: none"> あなたは、仕事で褒められることがありますか。 あなたは、自分が仕事で同僚からの期待を感じるがありますか。 あなたは、自分が仕事で役に立っていると感じるがありますか。
<p>5 仕事をする中で見えてきた夢や目標、希望について【展望】</p> <ul style="list-style-type: none"> 仕事について、あなたは、何か新しいことにチャレンジしてみたいと思うことはありますか。※労働 あなたは、生活場所を変えてみたいと思うことはありますか。※生活 あなたは、お金の管理を自分でしてみたいと思うことはありますか。※生活 あなたは、毎日の生活のなかで、何か新しいことにチャレンジしてみたいと思うことはありますか。※生活 あなたは、休日の過ごし方について、何か新しいことにチャレンジしてみたいと思うことはありますか。※余暇
<p>6 学校でもっと教わっておきたかったことについて【学習の意義】</p> <ul style="list-style-type: none"> あなたは学校で、もっと一般的な常識やマナーについて教えてほしかったと思いますか。 あなたは学校で、もっと読み・書き・計算など国語や数学に関する知識を教えてほしかったと思いますか。 あなたは学校で、もっと人との関わり方について教えてほしかったと思いますか。
<p>7 新型コロナウイルスの流行に関する質問</p> <ul style="list-style-type: none"> 仕事について、新型コロナウイルスの影響はありましたか。 新型コロナウイルスの影響で、生活の変化はありましたか。 新型コロナウイルスの件で、これからの仕事や生活について思うことはありましたか。

注) 1から6は榊・今林(2020)による卒業生へのインタビューの質問項目、7は本研究で新たに加えた質問項目

3.1. 被験者Aの事例

被験者Aは、実家から就労先に通勤しており、就労先での仕事内容は店舗販売店員である。

3.1.1. 被験者Aのインタビュー結果

被験者Aのインタビュー結果についてまとめた記録を Table 2 に示す。就労直後(約4か月)と就労後1年経過とでは、<仕事をするときに困ったことがあるかないかの認知><相談者の有無><仕事をしているとき以外の時間の過ごし方><働くことでの貢献感><学校で教わっておきたかったこと>の五つの枠組みで、特に変化は見られなかった。

変化が見られたのは、<仕事をする中で見えてきた展望>の枠組みの生活面と余暇面である。生活面では、お金の管理について、就労直後(約4か月)は自分で管理してみたいと思わなかったのに対し、就労後1年経過では自分で稼いだお金なので自分で管理してみたいと思っている。また、洗濯を自分でできるようになりたいという変化が見られた。余暇面では、給料を貰うのに慣れてきたと回答し、仕事で任されることがあるドリンク作りのレシピを覚えたいと思っている。

<新型コロナウイルスの流行に関して>では、仕事で感染症対策のための消毒をするなど仕事内容やお客の出入りの変化を感じている。私生活では特に大きな影響は感じていないが、手洗いやう

Table 2 被験者Aのインタビュー結果

就労直後(約4か月)のインタビュー結果	本研究(就労後1年経過)のインタビュー結果
<p><仕事をするとき困ったことがあるかないかの認知> 人間関係・コミュニケーションの面 相手の意見をしっかりと聞き、自分の考えを伝えることができています。周囲の人に伝えて、助けてもらったりしている。また、自分の仕事のノルマをこなすなど、与えられた仕事を最後までやり遂げることができています。 仕事の指示理解・対処能力の面 指示されたことの理解は、できたりできなかったりだが、どのようにすれば良いかを考え解決することができている。困った時はすぐに周りの人に聞いたり相談したりして対処している。 仕事の内容の面 今の仕事は、楽しいと思えることから自分に合っていると感じている。</p>	<p><仕事をするとき困ったことがあるかないかの認知> 人間関係・コミュニケーションの面 相手の意見を聞くことはできている。朝礼のときとかに話を聞くことができています。自分の考えは、相手に伝わるように自分で考えながら伝えている。与えられた仕事については、難しい仕事もあるが、分からないときは聞いているので、ノルマをこなせている。去年と一緒に、仕事のサイクルを一つ一つタイマーで12分を計って、仕事を回している。コミュニケーション面については、去年とあまり変わらない。 仕事の指示理解・対処能力の面 言われたことが分からないこともあるが、そのときはもう一回聞いて、分かりやすく説明してもらっている。仕事で分からないときや一人で解決できないときは、近くの人に聞いている。去年とあまり変わらない。 仕事の内容の面 周りの方々が明るくて雰囲気がいい。一緒にいて楽しいから今の仕事は自分に合っていると思う。去年と比べてあまり変わらないと思う。</p>
<p><相談者の有無> 仕事は職場の人と母親、プライベートなことは母親に相談している。障害者就業・生活支援センターの担当者は相性が悪く相談しにくい。</p>	<p><相談者の有無> 仕事の場合は、職場の人や母親に相談している。職場の人は、一応、店長など話しやすい人を選んでる。障害者就業・生活支援センターの担当者とは最近会っていない。特に困ったこともないから会わなくても大丈夫。去年と状況は変わらない。</p>
<p><仕事をしているとき以外の時間の過ごし方> 高等部時代の友達とメール等で連絡をとっている。内容は、「今日は暑かった」などの世間話。習い事は、小学部時代から習字をしている。これからも続けたい。休日は父親と近場のスーパーなどに出掛けている。</p>	<p><仕事をしているとき以外の時間の過ごし方> 高等部時代の友達と、ちょこちょこ、SNSで連絡を取っている。内容は、世間話。習い事は、去年まで習字をしていたけど、仕事が忙しくなってしまう。今は仕事を優先している。少しは、やめて後悔しているけど、仕方ないと思う。休日の外出は、去年は父親と出掛けることが多かったが、今は母親とが多い。母親とは買い物、父親とは映画に行く。去年と比べたときの休みの日の変化は、今年になってから、UVレジンを作り始めた。</p>
<p><働くことでの貢献感> 仕事中、器具類の交換や皿洗いをしたときに「ありがとう」と言われるなど褒められるなど、自分が仕事で役に立っていると感じているが、同僚からの期待は感じていない。</p>	<p><働くことでの貢献感> 仕事で、仕込みがきちんとできるときや器具などを交換したときに「ありがとう」と言われる。同僚からの期待は、去年と一緒に、どういときに期待されているかが分からない。</p>
<p><仕事をする中で見えてきた展望> 労働 仕事については、今ままで満足しており、何かチャレンジしてみたいと思うことはない。 生活 母親は、「一人暮らししてもいいんだよ」と言うけど、私はそうは思わない。一人暮らしとか考えたことはない。 お金の管理は、母に頼んでいる。一度母親と一緒にATMを使うためにチャレンジしてみたが、難しくも無いと思った。 家族でご飯を食べに連れて行きたい。親に言ったら自分の分だけいいよと言う。私は皆の分を払いたいの。 余暇 家族旅行に連れて行きたい。親に言ったら、食事と同じように、自分の分だけいいよと言う。私は皆の分を払いたいの。</p>	<p><仕事をする中で見えてきた展望> 労働 仕事については、満足している。最近有休がついたこと以外は、去年と一緒に、変化は感じない。 生活 一人暮らししてみたいとは思わない。母親は、去年と一緒に「一人暮らしをしてみたら」と言う。 お金の管理は、今も母親にしてもらっているが、自分で稼いだお金だから、自分で持ってみたいと思う。ATMも何回か母親と一緒に、できるようになった。洗濯を自分でできるようになりたい。今は母親にしてもらっている。去年は、ご飯を食べに連れていきたいと思っていたが、今はあまり思わなくなった。 余暇 休日にチャレンジしてみたいことはない。去年は、家族を旅行に連れて行きたいと思っていたが、今はあまり思わない。去年は初めての給料で、うれしくて人のために使いたかったが、今は、給料を貰うのに慣れてきてあまり思わなくなった。今は仕事でドリンクを作ることがあるが、もう少し習ったレシピを覚えたいと思う。</p>
<p><学校で教わっておきたかったこと> 一般的な常識やマナーについて、重要性を教えてほしかった。 数学はもう少しパーセントや何割を教えてほしかった。教えてはもらってはいるんだけど、今よく使うから思う。分からないときは親に教えてもらっている。 人との関わり方については、敬語とかもっと教えてほしかった。たまに言葉遣いに不安がある。正しいか自信がない。身に付いていないと感じている。</p>	<p><学校で教わっておきたかったこと> 一般的な常識やマナーについては、今は不自由ではないが、去年と同じように重要性を教えてほしかったと思う。 数学は、計算については、仕事をするとき必要なときがある。今でも分からないときは母親に教えてもらっている。去年と同じ。 人との関わり方については、もっと教えてほしかった。お客さんと接するときの対応とかで困ることがある。去年まではあまり接客はしたくなかったが、今はそういう仕事だし、しないといけないと思っているから。去年と同じで、言葉遣いに不安がある。</p>
	<p><新型コロナウイルスの流行に関して> 仕事では、対策をしないといけない。フロアのテーブルと椅子を消毒のため拭かないといけない。また、お客さんの人数が少し変わった。最初の頃はけっこう少なかったが、最近は少しずつお昼ぐらいいから多くなってきた。 生活では、特に生活に影響は感じていないが、手洗いがいをしたり、マスクをしたりしている。</p>

がいをしたり、マスクをしたりするなどの基本的な感染症対策への対応をしている。

3.1.2. 被験者Aについての考察

本研究でのインタビュー結果(就労後1年経過)は、就労直後(約4か月)と比較して職業生活における基本的な習慣に変化はないと言えよう。一方、<仕事をする中で見えてきた展望>の枠組みの生活面と余暇面での変化から、生活面での自立や仕事での向上心の意識の変化がうかがえる。お金の管理については、「自分で稼いだお金だから自分で持ってみたいと思う」と回答している。就労後1年以上経過したことで、自分で働いた結果、給料を得るという実感をもつことができたと言

える。これは、高等部段階で育てたい力の一つである「労働と報酬の関係の理解」(国立特別支援教育総合研究所, 2011)に関するものである。高等部段階で学んだことが、職業生活を経験することで、実際的な力に結び付いた事例と言えよう。また、余暇の時間に仕事で経験したドリンク作りのレシピを覚えたいと回答していることから、新たな仕事への意欲が高まり、自主的・自発的な学びを試みようとしていることがうかがえる。これは、キャリア教育で育てたい力の「基礎的・汎用的能力」のうち、「自己理解・自己管理能力」や「課題対応能力」に関わる力である。

3.2. 被験者Bの事例

被験者Bは、特別支援学校高等部卒業後グループホームを利用し、グループホームから就労先に通勤している。就労先での仕事内容は洗剤の作業員である。

3.2.1. 被験者Bのインタビュー結果

被験者Bのインタビュー結果についてまとめた記録を Table 3 に示す。就労直後(約4か月)と就労後1年経過とでは、<仕事をしているとき以外の時間の過ごし方><働くことでの貢献感><学校で教わっておきたかったこと>の三つの枠組みについては、特に変化はみられなかった。

大きく変化が見られたのは、<仕事をするときに困ったことがあるかないかの認知>の仕事の内容の面と<仕事をする中で見えてきた展望>の枠組みである。<仕事をするときに困ったことがあるかないかの認知>の仕事の内容の面では、就労直後(約4か月)は、仕事が自分にあまり合っていないと思っていたが、就労後1年経過では、どちらかという合っていると回答している。<仕事をする中で見えてきた展望>では、就労直後(約4か月)はパティシエをやりたいと思っていたのに対し、就労後1年経過では、できるかどうか分からないが、料理や飲み物を運ぶ接客係をしてみたいと回答している。変化が少し見られたのは、<相談者の有無>の枠組みである。就労直後(約4か月)は、仕事で困ったことがあったときには、職場やグループホームの人に相談をしているのに対し、最近ではグループホームの人には相談をしていない。

<新型コロナウイルスの流行に関して>では、勤務時間の減少による出退勤の時間や給料の額の変化を実感している。生活面でも行動範囲が狭くなり、小物づくりをはじめなどの影響がある。また、ニュースなどから、世の中の変化を感じており、今後の生活への影響を懸念している。

3.2.2. 被験者Bについての考察

本研究でのインタビュー結果(就労後1年経過)は、就労直後(約4か月)と比較して、<仕事をするときに困ったことがあるかないかの認知>の仕事の内容の面と<仕事をする中で見えてきた展望>の枠組みで大きな変化が見られる。就労直後(約4か月)は、仕事が自分にあまり合っていないと思っていたが、就労後1年経過では、「慣れてきたから、どちらかという合っていると思う」と回答している。<仕事をする中で見えてきた展望>でも、同じ業界で「新しい職場を探してみたい気持ちはある」と回答していることから、職場の人間関係では課題を感じながらも、仕事の内容は肯定的に受け止めていると言える。また、就労直後(約4か月)はパティシエをやりたいと思っていたのに対し、就労後1年経過では仕事を理解しはじめており、できるかどうか分からないが、料理や飲み物を運ぶ接客係をしてみたいと思っている。このことから、職種に対する自

Table 3 被験者Bのインタビュー結果

就労直後(約4か月)のインタビュー結果	本研究(就労後1年経過)のインタビュー結果
<p><仕事をするとときに困ったことがあるかないかの認知> 人間関係・コミュニケーションの面 仕事のときに相手の意見をしっかりと聞くことは、まあまあできている。忙しいときは半分しか聞けないときがあるが、しっかりと聞くとは思っている。自分の考えは、言いたくても言わずらうて言えない。どう言ったらいいかわからないし、言うタイミングがわからない。空気を読むのが難しい。どんどん忙しくて時間が流れていくから、結局は最後に怒られる。与えられた仕事は、自分の休憩時間を削って、最後までやり遂げることができている。</p> <p>仕事の指示理解・対処能力の面 指示されたことについて、最初の頃はわからないことがあったが、慣れれば理解できるようになった。困った時には、周囲の人に聞くか、自分で前に行ったことを思い出しながらしている。それでも、前とは若干変わって困ることもある。変更したことは伝えてほしい。困ったことは、可能な限り解決できている。誰でもいいから助けを求めているようにしている。</p> <p>仕事の内容の面 今の仕事は自分にあまり合っているとは思わない。実習のときはずっとその場において皿を取るだけだった。働いて初めて運ぶという経験をした。重たいものが多いから、(体力に不安がある自分には)本当に合っているのかなと思う。思っていたものと違う。辞めたいと思うときもある。怒られることもあるから。</p>	<p><仕事をするとときに困ったことがあるかないかの認知> 人間関係・コミュニケーションの面 仕事で、～してと言われたら、指示されたことをすることができているなど、相手の意見を聞くことはできている。自分の考えを伝えることは、できているか分からない。時にもよるが、難しいことを言われたら、何と言えればいいかわからなくて、言葉が出てこないときがある。与えられた仕事については、洗い終わった皿を並べて箱に詰めて直して、洗った皿が台とかに何も残ってないときに最後までやり遂げたと思う。去年は、休憩時間を削ってまでしていたけど、今は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、勤務時間が減り、休憩時間がない。</p> <p>仕事の指示理解・対処能力の面 いきなり指示をされると分からないこともあるが、少し考えても分からないときは近くにいる人について教えてもらう。去年とあまり状況は変わらない。仕事で、困ったときは、周りの人について解決している。去年とすると今は宴会が少なく、皿の置き場所が変わることでの困る状況は少ない。しかし、皿を持っていくときに、ほとんどの人は、形や色を大まかに伝えてくれるが、似たような皿がたくさんあるので分からないことがある。そのときは、もう少し詳しく聞いたたり、一緒に行って教えてもらったりしている。一番助かるのは、実物を見せてくれること。この料理に合う皿を持ってきてと言われても、料理が皿に盛られた状態を見ることはあまりないから、分からない。</p> <p>仕事の内容の面 慣れてきたから、どちらかというと自分に合っていると思う。以前は、仕事をしていて、遣り甲斐を感じなかった。今は、去年とすると新型コロナウイルス感染拡大の影響で、仕事が少なく、急かされることなく自分のペースでできるからお皿を洗うのが速くなった気がする。急かされると、自分のペースが乱されて、全然手が付けられなくなる。去年とすると、辞めたいとは思わない。今はお金を稼がないといけないと思っている。今は休みが多いので、別の仕事を探してダブルワークできるならしてみたいと思っている。ダブルワークをしていいのかなと思って、同じ職場の人に聞いてみたら、「ダブルワークは大変だよ」と言われた。仕事が忙しくなって大変というわけではなく、税金が何かが取られるのではないかと言われた。ダブルワークしないと生活が苦しい。</p>
<p><相談者の有無> 困ったことがあったとき、グループホームの人に相談している。職場の人にはしてはいるけど解決にならない。何も対処してくれない。お父さんには、グループホームに入っていて、離れているから、相談していない。友達には相談はしない。障害者就業・生活支援センターの人は最近来ないから相談しようがない。</p>	<p><相談者の有無> 仕事の相談は、現場責任者でない職場の人や中学校時代の友達に話している。グループホームの人には、最近、相談していない。 仕事以外のことは、主に友達でグループホームの人にも話している。 障害者就業・生活支援センターの人は、最近会っていない。相談しても解決しないから相談しない。</p>
<p><仕事をしているとき以外の時間の過ごし方> 高等部時代の友達とSNSで連絡を取っている。休日の外出はグループホームの職員や高校時代の友達、その保護者とする。気分転換しないと次の日の仕事がつきつくる。グループホームの利用者とはしない。一人で出かけるときは、バスで乗り換えの必要のないところに行く。</p>	<p><仕事をしているとき以外の時間の過ごし方> 友達と連絡は取っているが、以前と比べると、あまり連絡は取らなくなった。去年とすると連絡を取り合う人は減った。連絡手段はSNS。習い事やスポーツは、してみたいと思うけど、体調があまりよくないからできない。外出は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、今は買い物に行くぐらい。外出するときは、バスで行く。去年とすると、新型コロナウイルス感染拡大の影響もあって、行動範囲は狭くなった。</p>
<p><働くことでの貢献感> 仕事で褒められたことはない。同僚から期待されていると感じたこともない。与えられた仕事は、できて当たり前で感じ。上司からもそれぐらい当たり前と言われる。仕事で役に立っている自分からない。じゃまという感じの扱いをされる。仕事が遅いと言われる。</p>	<p><働くことでの貢献感> 仕事で、そもそも褒められることはない。やって当たり前。だから、遣り甲斐を感じない。褒められないから役に立っているのかどうか分からない。去年も同じことを言ったと思う。自分は、いてもいなくても変わらない気がするが、暇さえあれば、周りの人が話しかけてくれるので、相談相手として役に立っているのかなと思うけど、仕事としては、周りの人から見たときに、どう思われているのか分からない。</p>
<p><仕事をする中で見えてきた展望> 労働 仕事でチャレンジしてみたいことは、2階にパティシエさんがいる。そこでやってみたい。もともとパティシエになるのが夢だった。作っている人を見たいから、憧れる。 生活 生活場所を変えたいとは、あまり思わない。グループホームは、気の合わない人がいても楽しい。 余暇 余暇の過ごし方については、今のままで良い。旅行は、怖くてできない。今の状態で満足している。</p>	<p><仕事をする中で見えてきた展望> 労働 仕事でチャレンジしてみたいことは、接客をしてみたいが、自分でその仕事をこなせるかわからない。去年はパティシエをしてみたいと言ったが、仕事ではもういいかなと思う。個人的にはお菓子作りをしてみたいとは思っている。なんとなく現実が分かっていた。 生活 一人暮らしをしてみたい。グループホームに1年半住んでいて、ルールで行動が制限されるのが嫌だと思えるようになってきた。たまに友達や会社の人から夕食を誘われるが、グループホームの都合で認めてもらえないときがある。遊ぶ時間も制限される。友達と遊ぶ時間も自由にしたい。お金の管理は今自分で行っている。去年はカードをグループホームに預けていたが、今は自分で管理して良いことになった。 余暇 車の免許を取れたら良いと少しは思うが、取るのは怖い。もし取れたら、友達とドライブしたい。いざ取ろうと思うと、運転するのは怖いので取らないと思う。 一番チャレンジしたいのは、一人暮らし。今はできないが、新しい職場を探してみたい気持ちはある。他の職場で自分の力を試してみたい。同じホテル関係がいい。他のホテルがどんな環境なのか知りたい。</p>
<p><学校で教わっておきたかったこと> 一般的な常識やマナー、読み・書き・計算など国語や数学に関する知識については、仕事で特に不自由を感じていない。 もっと人との関わり方について教えてほしかったと思う。どう接すればいいかを教えてほしかった。どのタイミングで話しかけるのか。話しかけたときにこう話しかけられたら、こう返すとか。</p>	<p><学校で教わっておきたかったこと> 読み・書き・計算など国語や数学に関する知識については、仕事で特に不自由を感じていない。 一般的な常識やマナー、人との関わり方について、挨拶をするときのコツがつかめない。挨拶する相手が、今出勤してきたのか、帰るところなのかで、「おはようございますか」「お疲れ様でした」と言葉を選ばないといけないが、どちらかが分からない。学校では、同じ時間に出勤して、同じ時間に帰るような教わり方だったと思う。でも、それでは今の会社では通用しない。すれ違いざまに「お疲れ様でした」と言う、「おはようございます」と返ってくる時がある。相手が、「お疲れ様でした」と言われて困っているのが分かるし、今来たのになという表情をする。未だにコツが分からない。 去年とすると、嫌なことがあったときに、かわすのがうまくなったと思う。</p>
	<p><新型コロナウイルスの流行に関して> 仕事の時間が少なくなった。また、出勤の時間が遅くなって、バスはいつも空席が多い時間だから、3密対策としてのバスの時間をずらす必要はない。 生活面では、世間が、外出自粛の頃は、グループホームからも外出を制限されて、近くのスーパーしか行けないなど行動範囲が狭くなった。しなくなっていた小物づくりをまたはじめたが、材料費がかかる。 ニュースで有名人がなくなるとか聞くと、体が弱い人は亡くなりやすいのだと思うし、仕事もなくなっていくと思う。自分のこれからについては、助成金がなくなったら、どれくらい月の収入が少なくなるのか、自分の生活が苦しくなるのかと思う。</p>

分自身の適性を多面的に捉えることができるようになっており、就労直後(約4か月)と比べて、働くことに関する理解が深まっていると考えられる。これは、キャリア教育で育みたい力の「基礎的・汎用的能力」のうち、「自己理解・自己管理能力」に関わる力である。

＜働くことでの貢献感＞については、被験者Bは、仕事で役に立っているとは感じておらず、就労直後(約4か月)と比較しても変化は見られない。しかし、就労後1年経過では、「暇さえあれば、周りの人が話しかけてくれるので、相談相手として役に立っているのかなと思う」とも回答しており、被験者Bは職場での自分の存在意義を見出しつつある、または、価値付けていると言える。職場の環境は、あまり変化はなくとも、被験者Bの受け止め方や感じ方の変化が、就労を継続する力につながっていると言えよう。これは、キャリア教育で育みたい力の「基礎的・汎用的能力」のうち、「人間関係形成・社会形成能力」に関わる力である。これらの受け止め方や感じ方の変化は、新型コロナウイルスの流行の影響で仕事量が減少し、周囲から急かされることが少なくなり、自分のペースで取り組めると回答していることから、勤務時間や勤務中の多忙感の減少等、職業生活における環境が変化したことも要因と考えられる。

3.3. 被験者Cの事例

被験者Cは、榎・今林(2020)のインタビュー後、車を購入し、自家用車で実家から就労先に通勤している。就労先での仕事内容は清掃作業員である。

3.3.1. 被験者Cのインタビュー結果

被験者Cのインタビュー結果についてまとめた記録をTable 4に示す。就労直後(約4か月)と就労後1年経過とでは、＜相談者の有無＞＜働くことでの貢献感＞の枠組みで、変化は見られなかった。

大きく変化が見られたのは、＜仕事をするときに困ったことがあるかないかの認知＞＜仕事をしているとき以外の時間の過ごし方＞＜仕事をする中で見えてきた展望＞の三つの枠組みである。＜仕事をするときに困ったことがあるかないかの認知＞の枠組みで、就労直後(約4か月)は、仕事で自分の考えを伝える場面はないと捉えているのに対し、就労後1年経過では、自分の考えを伝える必要のある場面があると捉えている。また、仕事は自分に合っていると判断している理由についての変化が見られる。＜仕事をしているとき以外の時間の過ごし方＞では、就労後1年経過では、仕事に役立つフォークリフトなどの免許の取得を希望している。＜仕事をする中で見えてきた展望＞では、フォークリフトなどの免許を取得し仕事の幅を広げたい、一人暮らしをしてみたいなど、これからの生活に対して新たな課題を見出している。

変化が少し見られるのは、＜学校で教わっておきたかったこと＞で、就労直後(約4か月)は、「言葉遣いや人との関わり方について学校でもっと教わりたかった」と回答しているのに対し、就労後1年経過では思わなくなっている。

＜新型コロナウイルスの流行に関して＞では、仕事の勤務時間に変化はないが、除菌の作業が加わるなど仕事量は増えたと感じている。生活面では、マスクの着用や手洗いうがいをするなどの基本的な感染症対策をしている。この点について、今後、今以上の仕事への影響はないと思っている。

3.3.2. 被験者Cについての考察

本研究でのインタビュー結果(就労後1年経過)は、就労直後(約4か月)と比較して、＜仕事をするときに困ったことがあるかないかの認知＞＜仕事をしているとき以外の時間の過ごし方＞＜

Table 4 被験者Cのインタビュー結果

就労直後(約4か月)のインタビュー結果	本研究(就労後1年経過)のインタビュー結果
<p><仕事をするとき困ったことがあるかないかの認知> 人間関係・コミュニケーションの面 相手の意見をしっかりと聞くことはできている。自分の考えを伝える場面(必要性)がない。与えられた仕事を最後までやり遂げることはできている。 仕事の指示理解・対処能力の面 指示されたことについて理解はほとんどできている。たまに分からないことはあるが、聞き返している。分からないことや困ったことがあったら、一日の中で、仕事の流れを考えながら、できることをするようにしている。上司に電話したり、近くの同僚に聞いたりして解決している。 仕事の内容の面 今の仕事内容は自分に合っている。自分には清掃しかないから。高等部時代にいろいろと実習して清掃しかないと思った。今のところ清掃の仕事が一番合っている。他の仕事をしてみたいと、今は思わない。</p>	<p><仕事をするとき困ったことがあるかないかの認知> 人間関係・コミュニケーションの面 分からないときは聞いている。一回聞き直せば、だいたいスムーズに分かる。それでも分からないときはもう一回細かく聞いたりしている。去年と比べて、あまり変化はない気がする。自分の考えを伝えることについては、言えているときと言えていないときがある。汚れた履物や犬の糞があったとき報告が遅れたりすることがある。去年は、考えを伝える場面はないと思っていたが、考えを伝えないといけないと思う場面がでてきた。与えられた仕事は最後までできている。指示された仕事以外にも時間があるときには、言われたこと以外も頑張っている。 仕事の指示理解・対処能力の面 指示されたことについて、たまに理解できていないこともあったが、そのときは、「～と言うことですよ」と確認している。去年と比べて同じと思う。仕事で分からないことはあまりないが、あったときは、主任とかが電話が無線で聞いて、来てもらって対処してもらっている。主任以外にも自分より先輩なら電話する。主任には重大なときしか電話はしない。重大なこととそうでないことの区別はできているつもり。 仕事の内容の面 仕事は自分に合っていると思う。外での仕事で、環境が良いと思う。居心地がいい。去年と同じで、掃除が合っているとは今も思っているが、合っていると思う理由は、少しは変わったかもしれない。</p>
<p><相談者の有無> 仕事の相談は、上司と一緒に働いている同僚にしている。仕事以外はあまり困ることはないが、困ったら親にする。障害者就業・生活支援センターの人は会う機会がない。</p>	<p><相談者の有無> 仕事で困ったときには、上司とか一緒に働いている人。障害者就業・生活支援センターの人とは、少し前まではたまに会う機会があったが、最近会っていない。仕事以外で困ったときには、親かな。去年と変化はない。</p>
<p><仕事をしているとき以外の時間の過ごし方> 最近では誰も連絡は取り合っていない。以前は高等部のときの友達とSNSで取っていたが、自分から連絡をすることはしない。話す内容がない。休日の外出は、最近はお父さんとばあちゃんの家に行ったり、庭の手入れをしたりしている。遊びで外出はしない。友達と休みの日が合わない。</p>	<p><仕事をしているとき以外の時間の過ごし方> 連絡を取り合っている友達はいない。忙しくて誰とも連絡を取らない。たまに連絡が来ることはある。そのうちに、フォークリフトや中型自動車とかの免許を取ってみたいと思う。そういう免許を取ってあげば、仕事でも役に立つかなと思って。去年も少しは思っていたが、お金もなかったし、ほかにも優先することがあったから、まだ先かなと思って。もしものとき、他の仕事でも役に立つかなと思って。去年とすると免許を取りたいという思いが強くなった。外出は家族としている。友達とはない。外出先は、祖父母宅に行く。去年と変わらない。</p>
<p><働くことでの貢献感> 仕事で褒められることはある。いつもの仕事やたまにしかできないことをしたときに同僚から「ありがとう」と言われた。 同僚からの期待も感じる。違う部署の人から「期待の星」と言われたことがある。他は、ボランティアの人から「頑張ってるね」と言われたことがある。 自分が仕事で役に立っていると感じる。理由は、頑張っているから。トイレを掃除していたら利用した人から「ありがとう」と言われた。</p>	<p><働くことでの貢献感> たまに、お客さんや職場の人に「ありがとうね」と言われる。あまり皆がしない仕事を、時間があるときに、したときに褒められる。 同僚から期待されているような気がする。仕事を頼まれたときに思う。去年みたいに「期待の星」とか言われることはない。 職場の人が休んだときに、トイレの清掃とか、自分で回って掃除をしたり、代わりに掃除をしたりしたときに、自分が仕事で役に立っていると感じる。去年と比べて、自分で仕事ができるようになったと感じている。</p>
<p><仕事をする中で見えてきた展望> 労働 仕事でチャレンジしてみたいことはない。仕事内容は、一緒に働いている人と全く同じ。 生活 一人暮らしをしてみたいという希望はないわけではないが、今はいい。強い希望ではない。 お金の管理を自分でしてみたいと思う。今は、通帳は親が管理していて、引き出すときは親と一緒にいる。親が、お金の管理をさせると言っていたので、することになると思う。 運転免許があるから、通勤など自分で車を運転して移動してみたいと思わないかという質問に対しては、職場では、運転をしているし、運転自体はチャレンジではない。当たり前のこと。近日中に車を購入して自分で通勤することになっている。 余暇 欲を言えば、バイクの免許を取って、バイクを買いたい。</p>	<p><仕事をする中で見えてきた展望> 労働 免許を取って、これからの仕事の幅を広げたいと思う。去年とは違うと思う。 生活 一人暮らしをしてみたい。一人暮らしをしたいと思うが、家族で引っ越しをしたばかりなので、しばらくはないかな。いずれしてみたい。 お金の管理をしてみたいとは思いますが、今も親がしている。お金を引き出すのも親にしてもらっている。記帳は自分でしている。ATMの使い方は一応知っている。去年とあまり変わっていない。 余暇 免許の勉強とかドライブとかしてみたい。自分の車でドライブするのが楽しみになってきている。去年みたいにバイクの免許は欲しいとは思いますが、フォークリフトや中型免許の免許も欲しいと思っているので、どちらを優先しようかなと思っている。去年とすると免許を取りたいと思うなど変わってきていると思う。</p>
<p><学校で教わっておきたかったこと> 自分にとっては、特に不自由はないが、言葉遣いはもっと厳しくしてもらった方が良かったと思う。人との関わり方についても思う。自分は人見知りがあるので、2年ときの担任の先生のおかげで良かった。</p>	<p><学校で教わっておきたかったこと> 学校でもっと教わっておきたかったことについては、特にない。去年と比べて今は、言葉遣いについてもっと教えてほしかったとは思わない。今、不自由さは感じてない。</p>
	<p><新型コロナウイルスの流行に関して> 仕事では、除菌をしないといけないことで、仕事は増えた。常にマスク着用、手洗いうがいを厳密にしないといけない。勤務時間は変更ないけど、除菌など仕事は増えた。 生活面での変化は、マスクをするぐらい。通勤は、自家用車なので影響はない。 新型コロナウイルスにかからないように手洗いうがいとかマスクを忘れないようにしないといけないと思う。仕事はこれ以上影響はないと思う。</p>

仕事をする中で見えてきた展望>の三つの枠組みで大きな変化が見られる。<仕事をするとき困ったことがあるかないかの認知>の人間関係・コミュニケーションの面では、就労直後(約4か月)は、「自分の考えを伝える場面(必要性)がない」と認識していたが、現在は、「考えを伝えな

いといけないという場面がでてきた」と回答している。このことは、就労直後（約4か月）と比べて、就労後1年経過では仕事の全体を把握することができるようになり、「報告・連絡・相談」の必要な場面を認識する感度の高まったことが考えられる。

仕事の内容の面で、仕事が自分に合っていると思っている点については、就労直後（約4か月）と就労後1年経過とでは変化はない。しかし、就労直後（約4か月）は職業適性として清掃の仕事が合っていると思っていたが、就労後1年経過では、職場環境の居心地が良いという点も加えて仕事が合っていると回答している。これらのことから、被験者Cは、職業適性としての適切なマッチングが成立していると言え、就労継続の要因となっていると言えよう。また、就労直後（約4か月）と比べて、フォークリフト等の免許を取って、仕事の幅を拡げたいと思うようになってきている。就労直後（約4か月）は、「仕事でチャレンジしてみたいことはない。仕事内容は、一緒に働いている人と全く同じ」と回答していたが、仕事の幅は拡げたいと思うようになったのは、「もしものとき、他の仕事でも役に立つ」と回答している。このことから、今後の自分自身の可能性を理解し、今後の成長のために進んで学ぼうとしており、自ら主体的に判断して、キャリアを形成していこうとする力を発揮していることがうかがえる。これは、キャリア教育で育みたい力の「基礎的・汎用的能力」のうち、「自己理解・自己管理能力」や「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」に関わるものである。

新型コロナウイルスの流行について、仕事面では除菌の作業が加わっているが、勤務時間に変化はなく、本研究のインタビュー時点では、職業生活に特に影響はないと言えよう。

4. 全体的考察

本研究では、就労直後（約4か月）と就労後1年経過の結果を被験者ごとに比較している。3事例の結果と考察を通して、就労を継続するための視点について考察する。

被験者ごとの事例の考察から、就労を継続することで、在学中に学んだことの成果を確認できたことがある。このことは、特別支援学校での指導が、在学中に学習の成果を確認できるという短期的な視点での内容だけでなく、卒業後の成長・発達といった長期的な視点での指導が実践されていることの成果と言えよう。このような事例を現場の教師が共有することで、長期的な視点での指導をより意識することができよう。また、被験者3名に共通するのは次の3点である。

一つ目は、仕事についての相談は被験者3名とも職場の人に相談している点である。福井・橋本（2015）の知的障害者の離職に影響を及ぼす要因の一つに「仕事上の相談者がいない者ほど離職しやすい」という報告を踏まえると、被験者3名とも就労を継続できている要因の一つと言えよう。また、本研究の結果では、相談相手は、話しやすい人や相談する内容で選んでおり、必ずしも被験者にとって働く現場の責任ある立場の人とは限らない。これは、「基礎的・汎用的能力」のうちの「人間関係形成・社会形成能力」に関わるものである。

二つ目は、本研究でのインタビュー調査（就労後1年経過）では、＜仕事をすることで見えてきた展望＞に変化が見られたことである。労働と生活の面で、被験者ごとに内容は異なるが、新たに

チャレンジしてみたいことやできそうなことを確かなものにしたいという夢や希望がある。このように将来を展望できることが、働く生活の意欲向上となっていると言えよう。

三つ目は、今の仕事が自分に合っていると感じていることである。被験者Aと被験者Cは、就労直後（約4か月）でも合っていると回答しているが、被験者Bは、本研究でのインタビュー調査で初めて「どちらかという合っていると思う」と回答している。被験者Bは、就労直後（約4か月）に「辞めたいと思うときもある」と回答していることを考えると、本研究のインタビュー調査の時点で就労を継続できている背景には、このような意識の変化が一つの要因になっていると言えよう。自分に今の仕事は合っていると感ずることが、就労継続の意欲につながると言える。

被験者間での共通点から、在学中の指導としては、相談する力を付けること、夢や希望をもち進んで学ぼうとする力を育むこと、職業選択をするときに適切なマッチングをするための自己理解を高めることが、キャリア形成において有効であると言えよう。

なお、今回のインタビュー調査の結果からは、卒業生が仕事を継続していく中で経験したであろう不安や戸惑い、空虚感、孤独感などのストレスフルな出来事を把握することは難しかった。また、成長の見られた領域について定性的な分析だけでなく、定量的に分析するための工夫が必要であろう。これらの課題を解決することで、本研究の成果の有効性を高めることができよう。

引用文献

- 独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構障害者職業センター（2014）. 精神障害者の職場定着及び支援の状況に関する研究（調査研究報告書No.117）サマリー
- 福井信佳・橋本卓也（2015）. 知的障がい者の離職要因に関する研究 日本職業・災害医学会会誌, 63, 310-315. <http://www.jsomt.jp/journal/pdf/063050310.pdf> (2017.04.08)
- 今林俊一・榎慶太郎（2020）. 特別支援学校（知的障害者）における就労支援に関する研究(6)：卒業生・就労先へのインタビュー調査から 鹿児島大学教育学部研究紀要, 71, 115-129.
- 国立特別支援教育総合研究所（編）（2011）. 特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック ジアース教育新社
- 文部科学省（2005）. 特別支援教育を推進するための制度の在り方について（中央教育審議会 答申） https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05120801.htm (2020.08.10)
- 文部科学省（2012）. 高等学校キャリア教育の手引き
- 榎慶太郎・今林俊一（2020）. 特別支援学校（知的障害者）における就労支援に関する研究(5)：卒業生へのインタビュー調査から 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 29, 114-123.

付記

本調査の実施にあたり、Y県立Z特別支援学校高等部の卒業生の皆様方に御協力をいただきました。ここに記して深く感謝の意を表します。